

古美術品を見る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2966

古美術品を見る

佐々木達夫(金沢大学文学部)

考古学資料と古美術品は違う。だが歴史資料である考古学資料のきれいなものは古美術品として売買されている。今年の夏もなにか、古美術品を見た。私の専門でもある古九谷については問題が存在することが当然であるため今更感想もないが、最近研究の最前線に取り上げられた東南アジア古陶磁器については見終わった後に不愉快な気持ちが残った。偽物作りに間接的に関係し購入した善意の美術愛好家とその方々を騙して金儲けした美術商に対する怒りもある。

2004年秋は中部電力会長が中国陶磁器を主とする古美術品購入に関連して批判され辞職した。1．偽物が多く含まれる古美術品を大量購入したこと、2．購入価格は5億8千万円という高額であり会社の金つまり電力を使う人の金で払い備品としたこと、3．鑑定記録が不明朗であること、等が新聞で取り上げられた。

1．偽物を買うことは避けたい。東南アジア陶磁器の場合は、日本のバブル経済の金余りと異常な金銭感覚が招いたことだった。物を知って買っているのではなく、美術商という怪しい人たちが金持ちを騙して金儲けしている姿が思い出され気分が悪い。中部電力の場合はがらくたのような中国陶磁器を見る目もない文化素養のない経済人が特定の美術商から大量に会社備品として購入した結果であった。教養としての文化を持たない経済人の醜さを露わにした。彼らのような人々は文化活動に関しては個人的な趣味の範囲という一線を越えてはならない。

2．高額な美術品をまとめ買いすることは避けたい。研究者も偽物を鑑定できないこともあり、研究の継続と深化する時間も必要である。しかし、研究していない人が特定美術商の言うままに会社の費用を注ぎ込むことは、株式会社として経済組織としてあってはならないことだった。トップダウンを好む傾向が大学でも盛んだが、人間としての教養のない経営トップの秘密独断専行という悪い面が購入に関しても現れている。

3. ヨーロッパの有名博物館は館内で仕事としての鑑定を館員はしない。はっきりとそれを誰でもわかるように打ち出している。日本ではやや曖昧である。国立博物館の館員が鑑定していたことは誰でも知っているが、物を多く見る機会として利用し、館蔵品として購入されることもあった。金銭が動いたとも言われている。しかし館内で仕事時間中に古美術品を鑑定しないことは今では常識となっている。今回は鑑定が組織・館としての仕事ではなく、勤務時間内の個人的な仕事としてなされたとも報道された。館としての仕事なら上司に報告し、鑑定書も館に保管されるのが当然である。個人の場合は鑑定結果があいまいになり、言った言わないの問題がおこることがあり、新聞ではそのように報道された。そうしたことが嘘であれば、関係学芸員はたいへんな迷惑と被害を受けたことになる。地方公共団体としての博物館の管理運営も問われている。

古美術品を巡る問題を見ると、真贋ばかりでなく、当時の社会情勢や組織の権力争いなどまで明らかになってくる。基本的で正常な社会的感覚を麻痺させてはならない。偽物を買うことは心貧しい行為であるが、研究者でも騙されることはたびたびである。偽物を買うのは回春と売春の関係にも似ている。貧しい国で買い物をする人々が安いを連発するが、その国の社会のなかでの価格感覚を身につけてもらいたい。偽物を作り美術商が金持ちに売る行為には豊かな文化的な心がない。買った人も売った人も同罪である。それを扱う美術館も対応や態度に変化が要求されている。とくに個人や財団ではなく県市等の公共団体の博物館は十分に注意すべきである。

昨年、愛知県陶磁資料館で東南アジア陶磁器の話をした際、ミャンマー陶磁器と言って見てくれという人がいた。一目見て明らかに最近の偽物の青磁だった。本人や回りの人は本物と思っているから気の毒である。名古屋は香港などから運ばれた偽物が横行する土地の代表例の1つで、名古屋の美術商も偽物を積極的に扱っているように思える。こうした偽物が個人客に売られ、そのうち博物館にも入る。同じ種類の偽物は2004年秋に北陸の博物館でミャンマー青磁や緑絵陶器として展示されていた。展示前に一部を見せていただいたが、吐き気がするほど不愉快な気持ちになった。これまで20年間にわたり、こんなものを本物として展示公開していたのかと残念であった。展示前に偽物と伝えたのに本物として展示している学芸員の感覚も理解できない。

今でも本物と思っているとすれば、私の研究が間違っていることになる。それとも偽物をもっているコレクターのことを思いやっけての展示なのだろうか。いずれにしても壁の一面を飾る偽物群の存在は残念である。

東南アジアのなかでもミャンマー陶磁器は発見と研究が遅れ、鑑賞陶磁器としてはタイとベトナムが取り上げられていたに過ぎない。1983年から1984年にかけてタイ・ミャンマー国境で発見された陶磁器が本格研究の始まりとなった。山岳民族の墓から掘り出されたいが、日本に大量に美術商を通して購入され運び込まれた。1984年に美術商を通して日本に購入されたものは、時期が早いから本物と思われていた。さすがに当初から偽物が売られたとは誰も思わず、少し遅れて偽物が流行したと一般に言われていた。タイなどの骨董市場ではその後偽物のみが流通したと言われる。



ミャンマー、トワンテ窯跡の青磁盤、15世紀

しかし、1984年購入品にさえ偽物が多く見られた。美術商のほうがかようなコレクターよりも騙す技術が優れていることを再確認させる。しかし、本物についても美術商が言っていた産地には誤りがあった。美術商は嘘を言い、知らないくせに自分の知識と鑑定眼を固く信じているが、購入者と博物館は金に絡む話を信じてはいけない。良い勉強をさせていただきましたという個人レベルの話で終わらせてはならない。

ミャンマー陶磁器に関する最近の文献

佐々木達夫、野上建紀、佐々木花江、2004「ミャンマー窯跡踏査と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』27:147-246.

佐々木達夫、吉良文男、佐々木花江、2003「ミャンマー陶磁の発見」『貿易陶磁研究』

23:106-123.

Sasaki, T. & Sasaki, H., 2003, Southeast Asian Ceramic Trade to the Arabian gulf in the Islamic Period, "Archaeology of the United Arab Emirates" Trident Press, London, 253-262.

佐々木達夫,佐々木花江,2002「アラビア半島に広がるミャンマー青磁の発見」『金沢大学考古学紀要』26:1-11.

Sasaki, H. & Sasaki, T., 2002, Myanmar green ware - the kiln sites and trade to the Indian Ocean in the 15-16 centuries, "Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa", 26:12-15.

佐々木達夫,2002「東南アジアの窯跡と日本出土の東南アジア陶磁器」『東洋陶磁史』東洋陶磁学会, 300.